

(10) 船食会社経営者のオーラルヒストリー

語り手：中野種洋（中野船食社長）

1942 年 8 月 23 日生

聞き手：田上繁、森武麿、安田常雄、若宮幸一

松本和樹

聞き取り日：2013 年 8 月 5 日

場 所：中野船食（若松区本町）

船食の開業と朝鮮戦争

安田： さきほどおっしゃった、昭和 25 年ぐらいから船食の仕事を始められたということで。

この仕事自体は、戦前からあるんでしょ？

中野： この仕事自体は、戦前からあります。

安田： 25 年ごろっていうのは、なんていうのかな、やっぱり、そういう仕事がとっても必要になったていう。

中野： ですね。

安田： そういう広がりがあるんですか。

中野： 朝鮮戦争がありよった。

安田： そのせいですか。

中野： こっから持って行くのが近いやないですか。それで向こうで食料がとられないから、「こっちで往復分積んでいかないかん」ちゅうな感じ。

安田： じゃあ、そのころ結構、船食をやる方も増えてる訳ですか。

中野： いや。

安田： そうでもない？

中野： うーん。特殊な仕事ですからね。それでこれ、船は免税品とかは積めるんですよ。空港で免税品買うじゃないですか、安い。あれと一緒に免税があるんです。そやから、権利を持たんところじゃあ太刀打ちできん訳なんです。それで、当時はもう、今と違って煙

草をみなよく吸うし。そうしたら、煙草は今 410 円ですけど、今（免税だと）210 円ですか。

田上： 税金がかからなければということですね。

中野： 半値ですね。

森： 酒も？

中野： そうなんです。

田上： それを積んで出すことができた。

中野： はい、はい、はい。だから、どうしてもほかの人は入られん訳なんです。当時は酒類免許ていったら、今みたいに簡単に出入らんでしょ。もう酒屋さんに 3 年か何年か奉公して、そして、まあ、「お金が回せるな」っちゅう人ぐらいしか出してないんですよ。今はもうね、スーパーだったらどこでもすぐ出すていう感じですよ。で、権利を譲ってもらっただけでも、当時はもう 300 万とか。ああ。

田上： 300 万、400 万、500 万の話ですか。

中野： そやから、わたしらもこの仕事をやめたらですね、「退職金代りになるなあ」って思っよったんやけど、今は（全員笑う）。タダ同然ですね。

森： 先ほどの船を送った朝鮮に、朝鮮半島にも物を運んだ訳ですか。

中野： そうですね。新日鐵とかああいうようなと

ころから朝鮮半島に。新日鐵やら。

森： 軍需品なんかも運んだ？

中野： 軍需品やらいろいろ向こうで。肥料なんかもあるやろうし、そこは、旭硝子が肥料作りよったんですよ。

森： 旭硝子ね。それを朝鮮半島まで？

中野： はい。それにあの黒崎の三菱化成ですか、あそこが、飼料作りよりも。コークスやら、肥料やら作りよりも。それを持ってくのに、食料ですね。

森： 食料がね。朝鮮戦争で直接米軍だとか、上陸した場合の米兵に向かうということはなかったんですか。

中野： 米兵はこっちから出らんのですよ。佐世保とか基地があるやないですか。

森： じゃ、民間の？

中野： そうですね。民間の日本郵船とか、大阪商船とか、山下新日本汽船とか、いろいろありますわね。

森： なるほどね。景気がよかったときに乗った訳ですよ、お父さんはね？

中野： そうですね。

森： それが始まり？

船食の経営

安田： ちょっとその、ファックスの注文が来るという、もう1つ前の時代はどんな格好だったんですか。

中野： 注文を聞きに行きよったんですよ。

安田： じかに聞きに行く？

中野： 船に。

安田： 船に？

中野： はい。

田上： 中野さんが？

中野： はい。車で行ったり、船で行ったり。ブイに付いとる船は船で行くし。

田上： 接岸しているのは車で行く？

中野： 車で行くし。

田上： それは、初めてでも？ 今までの取引がないでも？

中野： ないでも。

田上： ああ、そう。営業？

中野： 営業です。

田上： へえ。

安田： 御用聞き？

田上： 御用聞き。だってほら、何軒もあったでしょ、前は？ 中野さんのところだけじゃなく。

中野： 前は4、5軒あったんです。

田上： それは順番で？

中野： 順番とかでなく。

田上： 行って？

中野： 行って。

田上： 敢えて自分が行けるという感じで？

中野： はい。そうです。

田上： 競合するときもある？

中野： あります。

田上： そのときは？

中野： そのときは、お客さんに決めてもらう訳ですね。

田上： それは値段の問題とか、その納入方法とか、いろんな名義的なものとかも含めて？ じゃなくて？

中野： ほんなら、船ていうのはですね、とにかく、船会社ありますよね？

田上： ありますよね。

中野： その船会社の中でも、「AさんとBさんとCさんは中野さん、えーっと、A、B、Cだから、Dさんは何々さんとか、若宮さん」とか、大体決まっとるちゅうか、その自分の好みで買っていい訳ですよ。

田上： ほお。船に乗ってる人が？

中野： はい。大体「指定制」っていうのがあって、会社から2軒か3軒くらい、指定してる訳なんですよ。その中で「サービスのよい物を持って来られるところに」っちゅうこと

で。それは自分が注文聞き行かんやったら、「うちもいいですよ」って取って来られる訳ですよ。

田上： まあ、事前に会社が大体指定する船食さんがある訳ね。かといって1軒だけでなく、やっぱいろいろと。

中野： いや、1軒の場合もあります。その前が競争で、船にも1番に行って、船が入って来よるじゃないですか。自分の船を持って行くやないですか、横に。それで海賊と一緒にですよ、飛び乗って（笑う）。

田上： その場合、じゃあね、船会社の方に先になにか。

中野： いや。指定制度ができたのがその後です。その前は海賊と一緒にですよ。早よう行った者が勝ちみたいなもんですよ。

田上： その分かれ目で何年ごろですか。

森： 指定制度ができたのは？

中野： 指定制度ができたのは、40年くらいやなかったですかね。

田上： あー、もうそんなあれですか。40年ころね。じゃあ、それ以前は早い者勝ちというか？

中野： まあ、早い者勝ちとか、顔見知りとか、今まで何回か取ってもらったこともあるお得意さんとか。いろいろあるんです。

船食とハシケ・機帆船

田上： お父さんも戦争に行かれる前はいろいろ、諸式さんということで乾物をやられていたから……。

中野： そうですね。

田上： すぐ船食の方に移ることも可能だった？ その中野さんていうか、お父さんが始められる前に、近辺の方が船食をやられてたんですか。

中野： そうです。

田上： むしろ、後から参入された。

中野： 後から参入ですね。

田上： その方たちは、何年ごろからやってられてんですかね？

中野： そうですねえ。

田上： 大正ぐらいからやってんですかね？

中野： いやあ、大正はないでしょう。

田上： ないですか。石炭がこっち来て、大体いつごろですかね？

中野： 船食っていつて扱うんには、結構量がまとまった仕事をするんですよ。そやけ、普通の一般の商店に機帆船やなんかは買いに行って航海に出よったと思うんですよ。

田上： そのときは、まだ……。

中野： うちあたりは、ほとんど貨物船、鋼船ですよんね。はい。

田上： 船食さんも鋼船ではなくて、機帆船とか？

中野： そういうところはほとんどないと思います。

田上： ない。みんな鋼船を目的にして。

中野： 人間も乗ってないからですね。それと、機帆船の量が半端やないぐらい多いんですよ。それに配達するちゅったら、人間なんぼおっても足らんです。

田上： そうすると、機帆船とか、ハシケ（舢舨）とかで住まれてる人たちはやっぱり、自分で接岸したときに買いに行くってことで？

中野： そうですね。

田上： こちらにも？

中野： 買いに見えたりもしよったです。

田上： それは現金で買い……？

中野： そうです。今の場合はキャッシュが多くなったんですが、皆月末払いで。資金を寝かせないといけんから、やっぱしね。だれかれできないんですよ。

田上： そうですね。すぐ現金入る訳じゃないですからね。

中野： 1回の納品が70万、80万とするやないですか。そしたら、もうその1カ月寝かせるちゅうたら、だいぶ寝とるんですよ。

田上： 手形決済とかはなくて、小切手で決済ですか。

中野： いや、銀行振り込みで。まあ、相手も大きい会社ですから。船会社となるとやっぱり日本の有数、川崎汽船とか、日本郵船とかちゅうたらもう。横浜に山下通りとかある、あれ山下新日本、山下汽船のあれですよ。

田上： この近辺の鶴丸とか、飯野海運とか、そういうことはまた別の？

中野： いや、そういうところも来るんです。

田上： そうですか。その3杯ある船は、そこの取引になるのですか。

中野： はい、そうです。

田上： 最盛期は相当来てたんでしょ、鶴丸とかは？

中野： そうですね。1日に1隻とかそんな感じですからね。

田上： そうですか。

中野： 鶴丸の船が1隻、それで、最盛期のときは、今みたいに忙しくないですよ。12時間しかおらんとか、なんとかやないですもんね。もう、首つないで5日も6日もごろごろするやないですか。だから、もうゆっくりできますわね。

田上： 今みたい半日でっていう訳ではないから？

中野： 入港と同時に、今みたいに納めるのが、却っていいか分からんですよ。長いことおったら、船の人も一杯呑みたろうから、ほんなら、接待もたまにはせにゃいかんやろうし、そんな感じで。

田上： 中野さんが接待しなきゃいけないんですか。

中野： そうですね、「たまに一杯、社長行こうや」いうたら、「いやー」ちいう訳にはいかんやないですか（全員笑う）。買ってもらわなかんし、ね。

田上： このいろいろ、あっちの連歌町あたりまで出張ったり、新地で遊んだりってのは？

中野： わたしらのときは新地の。

田上： あっ、そうか。昭和33年以降はないですからね。

中野： わたしのときは、あと1年早かったら遊郭行けとったんだけど。

田上： 33年よ、あれは。

中野： 禁止になった。

田上： お父さん亡くなられて3年、30年間、だから3年間。高校生ですからね。

ウロさんと船食

田上： 中野さんのところは、若宮さんから少しうかがったんですけど、そういう比較的沖に停まっている大きな船のところに納入する機会が多い？

中野： はい。

田上： で、40年とか30年とか20年代に、そこにもうたくさんのがいたでしょ、ハシケとか。そういう人たちも当然食料は必要ですよ？

中野： そうですね。

田上： そういう人たちに届けるっていうか、するのやはり船食さん？ それとも彼らは自分で買う？

中野： 彼らは自分で上がって、町も近いし。そやけ、すぐ前にハシケのこう、あったんですよ、停まれるところが、うちの前々ぐらいに。で、昔はその、終戦当時はうち配給しとったから、うちからお魚とかをうちに買いに来よった。

田上： こちらの方に？

中野： というか、物がなから、なんか昔みたいに切符切ったり、なんたりで、米の配給とか、野菜とか、なんとか配給があるやないですか。あんなのは、うちがしよったですけども。そのあとは自分たちで買いに、市場がすぐ近くにもあるし。それと、「沖ウロさん」っていう……。

田上： ウロさん？

中野： はい。ウロさんが。「沖ウロ」ていうんですね。沖に出てうろうろするからウロさん、いや、どうか知らないですけど。いろいろいわれるから。それにあの沖ウロさんにいくのに資金的なあれがないもんで、品物をうちから沖ウロの船に出して、そして、ぐるーっと回りよったですね。主に機帆船が多かったんやなかろうかと思いますよ。それも何年ですか、30年後半にはほとんどないようになって。わたしがたまに見たんは、魚専用の沖ウロさんがおってね、それはあの各船、各船回って行きよったみたいですよ。

田上： 水とかなんとかも、水を売ってるウロさんを見たことがあるって言ってました。こちらは、水は？

中野： 水は、うちは売ってない。

安田： さっきの沖ウロさんが一番いっぱいいたっていうのかな？ 全盛期っていうのはいつくらいになるんですか？

中野： そうですね。昭和20年の終わりから、30年の半ばくらいまででしょうね、半ば。40年くらいまでやとったかなあ。ていうのは、ほらここは町が近いんですよ。だから、自分たちで買いに行くっていう人もかなりいたと思いますよね。町が遠いで、なんかわたしの聞いた話じゃあ、岡山の水島辺りは町が遠いで、沖ウロさんが多いちてから。

田上： なるほどね。

中野： あそこは三菱だな。

田上： 沖ウロさんっていうのも、免許とかなんかいるんですか。

中野： いや、伝馬船にちゅうか、どうだったかなあ。やっぱりあの伝馬船やったですね。伝馬船で毎日行きよったですね。

森： エンジンなしで？

中野： エンジンなしでね。

田上： 船からおらぶですかね？

中野： お得意さんがおりましょうけね。もう顔な

じみになつとるからね。毎日出るからね。

田上： その人たちは鋼船じゃないでしょ？ まったくの……。

中野： 機帆船とか、ハシケとかね。

田上： 相当この辺りにいたんですかね、人数的にね。お一方ね、まだいらっしゃるというんですけど、ちょっともう語ってくれない。年だからっていわれて断られてるんです。どなたかいますかね？

中野： はあー。もういないでしょ。

田上： 相当高齢なんですか？

中野： わたしが20代から30代前までのときにもう（当時ウロさんは）60年代ぐらいですからね。そやけ、もうわたしがあれから40年経つとるけ、もういないですよ。

森： 沖ウロさんって、魚とか、水とか専門のウロさんもいるんですか。

中野： わたしも納品行ったとき、ちらっと見たんやけど、魚の沖ウロさんが専門で、それは後半出たんですけどね。エンジン付けてですね。ばあつと新日鉄の中から三菱化成から、三菱セメントですか。あの辺の洞海湾全部回りよったみたいですね。かなりええ商売されよったんやないんやろか。

森： 海の魚屋さんて感じですね？

中野： そうです。そやけ、魚の新しいの持って行ってやったら喜ぶんやないですか。

森： 町まで行かないでいいからね、いちいちね。

森： 行ったら、中に入って見るんですかね、買うときには？

中野： 見るでしょうね、自分の好みの。そやないと、なんでもかんでもいいという訳には（笑う）。

森： 写真残ってないだろうねえ？

中野： そのころの写真はないと思いますよ。今だったらバカチョンでもあってね、できるんやけど。そのころあんた、一眼レフとか

……。

田上： 構えないと駄目ですからね。貴重な資料
 と思いますけどね。1枚か2枚あるんですよ
 ね、若松図書館に写真があります。

中野： あっ、そうですか。あれはもう（貴重）で
 しょうねえ、後世に残そうと思って写した分
 でしょうねえ。